

# いもの子の歌

## 障害者が地域で暮らし、働くために

### ●第8回 青い屋根の家

#### ■青い屋根のほくほくハウス

青い屋根の家

一、夕暮れが西の空を染めて  
電車が走る僕を乗せて  
汚れたシャツを洗いながら  
明日のことを考える  
家族の元を離れて僕は僕の方で  
住み慣れた家を離れて君は君の方で  
暮らしていくのさ青い屋根の家

二、通りでは笑い声が響き  
明かりが灯る2階の窓  
開いたノートに書いた絵は  
やさしい父と母の顔  
家族の元を離れて僕は僕の方で  
住み慣れた家を離れて君は君の方で  
暮らしていくのさ青い屋根の家

この歌は、いもの子が初めてグループホームを開設した年に生まれた歌です。初めての



◀ほくほくハウス外観。

撰ることや痰を出すこと、外出することなどで直接的な介助を必要としていました。当時、障害者の訪問介護の制度がなく、毎日ボランティアが調理や食事介護をして生活を支えていました。ボランティアがいらない長期休暇のときには、いもの子の職員が介護に向いていました。地域で暮らすための資源が足りないところをいもの子の実践が切り開いていったのです。

作業所の支援だけでは解決できない地域生活の課題にとりくむために、2005年、地域の人々が気軽に立ち寄ることができるよう、



▶筆者右端

障害者相談支援センターのびらか

山田英紀

ホームは青い屋根でした。

第2川越いもの子作業所が開所し、いもの子の働く場は3カ所となり仲間が増えていきます。そうしたなか、親が病気になるたり、亡くなったりと親の状態が変化してきました。両親が他界し、暮らす場がなく長期入院となり、精神科病院から通所する人。一人暮らしをしており、精神疾患があるために日常生活の支援を必要とする人などいもの子を利用してきました。朝・夕食事介助が必要な人や夜間不安で救急車を何度も呼んだり、家に帰らず捜索されたりなど、いもの子が開設されて10年がたち、多様な支援の課題が生まれてきました。作業所の職員の支援が、日中の勤務時間以外にも増えていきました。

2000年から入所施設をもたない法人でもグループホームが運営できるようになり、これを機会に一気にグループホームづくりを進めました。4LDKまたは5LDKの貸家物件を50件近い不動産屋さんをまわり、紹介してもらいました。駅に近く、学生街でもあ

川越市の商店街の一角に「障害者生活支援センターのびらか」を開設しました。グループホームの統括、ヘルパー事業、生活支援ワーカーの拠点となり、在宅生活の支援の役割を担うことになりました。

障害者自立支援法の施行の2006年から、川越市の相談支援事業の受託法人となり、新たな相談支援事業が始まりました。3障害のすべての相談に対応することになり、新体制がスタートしました。その後、川越市は、障害者相談支援事業の拠点として、川越市障害者相談支援センターを設置しました。今まで各事業所で相談を受けていましたが、センターでは新規の相談をそこで受ける体制となりました。その体制のなかで、いもの子の「一人ぼっちの障害者をつくらない」という理念を大切に行ってきた支援をこれからは川越市全体の支援として広げようと考えました。

#### ■相談支援の基礎を築いたケース

Aさんは、父と母と知的障害のある2人の姉と暮らしていました。幼少期から経済的に困窮し、父親は威圧的な態度でAさんに接していました。母が出ていき、姉たちも思春期になると家を飛び出すこともありました。Aさんは中学校を卒業後、工場やお寿司屋に住み込みで働いていましたが、無断欠勤や金銭トラブルなどで仕事が長続きしませんでした。家のお金を持ち出して使ってしまったり、漠然とした身体の不調を訴えて病院に通院して、自分の納得のいくまで次から次へと病院を変えることを繰り返してきました。父親に叱責され、家を飛び出し、野宿すること

り、お店も揃っている場所に、グループホーム第1号、青い屋根の家の「ほくほくハウス」を開設しました。  
ふかしたお芋のように温かいイメージで命名されました。地元自治会に説明に行き、自治会長に快く了解していただきました。親から離れた仲間たちは、新しい生活が始まり、今までの生活で培ってきた力をグループホームの生活で発揮するようになりました。夕飯前の洗濯の時間に、今日の出来事の話がはずみ、ほかの仲間たちが話に加わります。今日やった仕事のこと、給料の使い道、家族や姪っ子のことなど、作業所では話さなかったことが夕方のほっとした時間に話され、時間がゆっくり流れていきます。今までにない仲間たちとの近い距離感、家族になったような感覚でした。

#### ■相談支援事業「のびらか」の生発

一人暮らしをしている全身性の身体障害のある仲間がいました。筋緊張が強く、食事が多くなりました。そんな生活に嫌気がさし本人から、中学校時代に親身になって世話になっていた先生に「今の生活をやめて、まともな暮らしがしたい」と相談したのです。その先生の紹介でAさんを支援することになりました。

川越いもの子作業所に自宅から通所することになりましたが、無断欠勤があったり、職員やほかの仲間とトラブルを起こしたり、落ち着かない日々が続きました。家を飛び出し、行方不明になることが増え、在宅ではAさんを支えられないと判断し、別法人のショートステイを利用し、川越いもの子作業所に送迎、通所することになりました。その後、Aさんから「グループホームで生活したい」と希望が出て、いもの子が運営するほくほくハウスへ入居することになりました。

その後もAさんは、目の前の欲求を我慢できず、不安定になり、問題行動が顕著に現れ



▶ホームの居室にて。